

A Glimpse of Australian Slang

Yasushi Higuchi

This is a report of Australian colloquialisms or slang expressions I picked up when I visited schools in Queensland in August, 1993.

Some of them were already reported in my previous report to this Bulletin (No. 12), where I tried to describe part of Australian life from a linguistic point of view. In this report, however, I try to describe Australian colloquial or slang expressions a little more systematically.

The topics treated here are as follows:

- (1) Rhyming Slang, such as *trouble and strife*, and *Captain Cook*
- (2) Intensifying Simile, such as *awkward like a koala up a gum tree*
- (3) Words ending in *-o*, such as *arvo* and *speedo*
- (4) words ending in *-ie*, such as *schoolie* and *chippie*
- (5) Aboriginal borrowing and coinage from native English stock, *etc.*

Some swear words used by high school students were also collected but are not reported here, not because they were too vulgar but because they need further analysis to be presented as linguistically meaningful data.

オーストラリア英語の語彙

樋 口 靖

オーストラリア英語の発音は訛がひどくて理解しにくい、といわれるが [ei] が [ai] にかわり、それにあわせて [ai] が [oi] に変わるぐらいは少し慣れればコミュニケーションに何の支障もきたさない。オーストラリア英語の特徴、おもしろさはむしろその豊かな語彙にある。オーストラリア英語の語彙を構成するものは、土着語 (Aboriginal language) からの借用、新造語、従来の語が意味変化を伴って用いられているものが中心である。

1. アボリジニーからの借用語

ある言語文化が新しい環境に移されたときに生じる一番の変化は語の借用である。アメリカ人が新大陸においてはじめてみる動物、植物を表すのにアメリカインディアンを借用したのと同様にオーストラリアでは動植物や地名にはアボリジニーの言語をそのまま借用した。

Kangaroo (カンガルー) は今では有名になり説明の必要がないかもしれないが、キャプテン・クックが初めて見る尾の長い動物を見て、あれは何という動物かとアボリジニーに英語で尋ねたのに対し、“Kangaroo. (=I don't understand what you mean.)” と答えたのをクックが誤解したといわれている。これは民間語源説 (Folk etymology) とよばれるもので、学問的な説明はまだ行われていない。

Koala (コアラ) は koala bear と呼ばれているが熊ではなくカンガルーと同じ有袋類である。語源はアボリジニーで以前は Koolah と綴られていた。ニューサウスウェールズ州 (NSW) にある地名 Coolah や Coolac は koolah に由来しているといわれる。

Kookaburra (クッカバラ) はその笑い声のようなき方で有名な鳥であるが、ワライカワセミ (laughing jackass=大声で笑う馬鹿) という英語名がある。英語名は海外ではよく知られているがオーストラリアでは現地語の名称の方がよりポピュラーであるらしく、たいていの人はこの現地語名で呼んでいる。この鳥は NSW 州のシンボル鳥 (bird emblem) である。

地名についてはその数は多く、数え上げればきりがながい、観光地で有名なものを例にとると、シドニー近郊のコアラのいる動物園がある Taronga や、ビーチで有名な Bondi など

も現地語に由来し、Taronga は “a beautiful view” (美しいながめ)、Bondi は “the sound of tumbling waters or of seas rolling in on a beach” (逆巻く波や海岸に打ち寄せる波の音) の聞こえる所という意味である。

2. 英語による新造語

現地語からの借用に頼らずに自前の英語でもって周りの動植物を記述することも多い。これには複合語の形をとるものが多い。

Black (黒) を用いた複合語には Western Australia (西オーストラリア) 州のシンボル鳥である black swan (オーストラリアコクチョウ)、くちばしの赤い鳥全体を指す redbill, beefwood (モクマオウの木—その材質が赤いビーフの色をしているためそう呼ばれる) などは色のイメージからの造語である。

これに対し先に述べた laughing jackass はその耳障りな笑い声のイメージから生まれた語であり、raspberry-jam tree (オーストラリア産アカシア) は切ったときの木の香りがキイチゴに似ていることからつけられた名前である。

オーストラリア英語の語彙の中で特によく知られているのは牧畜に関する語である。この種の複合語は station, run, stock の3語が中心になっている。

Station はオーストラリア英語では「駅」だけでなく、「牧場」を指す。もともとは農業、牧畜の振興のためにもうけられた政府の事業所 (の施設) を指していたものが私有の牧場を意味するようになり、sheep-station, あるいは cattle-station などのように用いられ、station-hand (牧童) などの複合語を生み出した。Run についても同様で牧草地を指し、sheep-run, cattle-run というように使われる。

Stock は家畜のなかでも特に cattle (牛) を指し、stock-keeper, stock-hand (ともに牧童のこと)、stock-rider (囲いのない牧場で stock-horse にまたがって牛を追う人のこと) などの語がある。オーストラリア英語で stock-holder といえば、株主だけでなく、牧場主を指すこともあるから要注意である。

オーストラリアの広大な国土での生活から生まれたものでは flying doctor が有名である。これはもうずいぶん以前にすでに日本の英語教科書などで取り扱われたこともあるのでよく知られている。遠くにいる患者を診察するのに飛行機に乗って飛んで行くお医者さんのことである。

同じく遠隔地にいる人への教育制度として school of the air がある。これは無線による通信教育のこと。こういった通信教育は distance education とよばれる。学習方法もさまざまに単に無線や郵便によるだけでなく、ファックスなどの最新機器・設備を用いておこなわれるもので telelearning という語も用いられている。

上記の例は既存の英語を用いて新しい環境を叙述しようとしたものであるが、オーストラ

リアでは英語の単語が英米その他の英語圏で用いられる意味とは違った意味で用いられる場合がある。これがいわゆる Australianism の中心をなすものでわれわれにとってもっとも興味のあるものなのである。

ブリスベンでホームステイしたときに、部屋のごみや食べ残しを捨てようと思い「ゴミ箱はどこにありますか」と聞くのに“garbage can”を用いたところホステスのラムシヨウ婦人が“garbage!”とって夫の方を見てゲラゲラ笑っていた。イギリス英語ではゴミ箱は“dustbin”を使うのでそれで笑ったのかと思っていたが、オーストラリアでは「なんて馬鹿な。そんなことあるもんか!」といった意味で間投詞的に用いられることがあると知ったのはずっと後になってからである。

次にそういったいわゆるオージー・イングリッシュの真髄ともいえるものについてみていこう。

3. オーストラリアの俗語

オージー・イングリッシュはフォーマルなレベルではなく、気のおけない友人（マイト）同士やインフォーマルな形式ばらない会話において用いられる英語で、俗語あるいは口語の語法である。この場合の俗語とは、一般的な口語において用いられるもので、タブー語などのいわゆる卑俗な語ではない。

アルコールに関する語

オーストラリア人のアルコール好きは有名である。したがってアルコールに関する俗語は数多い。

アルコール類一般を俗語では booze とか grog と呼ぶ。ブーズは「酒を飲む」という動詞としても使える。グログも同様である。Turps もアルコール類一般を指す。Amber fluid（琥珀色の液体）という詩的な語をあげる人もいたが、あまり一般的ではないようだ。Piss はビールあるいは強い酒という意味で使われるがやや品が欠けてくるような気がする。飲兵衛は pisspot と呼ばれるとか。本来の意味は chamber pot = 寝室用のしびんのことである。

ボトルや缶に入ったビールは coldie（冷たいの）または tinnie（缶入り）とも呼ばれる。375 ml 缶は通常の 750 ml 缶の半分のサイズでこれは stubbie（小さいの）である。

オーストラリアでは各州で様々なビールが生産されており、それぞれのビールは愛称で呼ばれる。クイーンズランド州のビールではフォークス、XXXX のマークのビールが有名であるがこれはその形が似ていることから barbed wire（有刺鉄線）と呼ばれている。メルボルンでは Fosters がよく飲まれるが、こちらはの愛称は Bluey。その他のビールも缶やラベルの色で呼ばれる。Victoria Bitter Beer は Green, Carlton Draft Beer は A whitey, Swan のラガーは Black Duck, これはマークの鳥の色である。

ワインは, plonk, red ned, Mickey Willies などと呼ばれる. Plonk の語源については, 安物は飲みすぎると足をとられるからか plunk (ドスンと倒れる) の変形, あるいはフランス語の vin blanc (白ワイン) の訛ったものではないかと言われている. Mickey Willies はメーカー名からきたもの.

パブで飲むときに覚えておくべき表現は shout (シャウト). これは to buy a round of drinks (一同に酒をおごる) という意味で, 誰かが最初の一杯を払ってくれたら, その次には "Let me shout this time, mate." レッミ・シャウト・ディスタイム・マイト (今度はおれに払わせてよ) というのがオージー・エチケットである.

オーストラリア英語でパブといえは, 本来のパブ (public house) に加えてホテルをも指す. ホテルはパブと同様お酒の飲める場所である. 小さな町のホテルはパブと同じ役割を果たしているのである. レストランでも酒類が出されるが, ライセンスのある店に限られており, そうでない店は BYO Restaurant である. BOY は Bring Your Own (grog) (P. O. D.) の略で酒類は自分で持ち込めという意味である. ついでながら「はしご酒」(をやる) は英語では (go) bar-hopping などと訳されるが, オージー・イングリッシュではちゃんと pub crawl が登録されている. ただスクロールといってもスピードは速くなく slow progress from one drinking-place to another (P. O. D.) で「ゆっくりと場所をかえて飲みあるく」ことである.

空港などには Bistro と呼ばれるコーナーがあり, みやげ物店などが閉まった遅い時間や早朝にも開いている. これは元来は「小酒場」という意味ではあるが, セルフサービスのレストラン, 軽食堂をも意味する.

以前大学生にオージー・イングリッシュについてアンケートしたときに, グリフィス大学の Sam 君という学生がアンケート用紙に次のようなコメントを書いてくれた. ここでは原文のまま載せておく. 下線部はオージー・イングリッシュである.

When us cobbers or mates go to the pub to get pissed we usually talk bullshit and have a bloody good time. Hope you can join us for a good piss up sometime and learn a little more Aussie English. (友達とパブへ飲みに行くときたらんおしゃべりをして楽しくやるんですよ. いつか一緒に飲んで, もっとオージー・イングリッシュが覚えられるといいですね)

Rhyming Slang (押韻俗語)

押韻俗語とは, ある語の代わりに, その語と同じ音で終わる (脚韻を踏む) 語または語句を用いて表現するもので, 例えば兵士の俗語で loaf of bread といえば head (頭) または dead (死んでいる) というように, 最後の [-ed] が韻を踏んでいる. 日本語でも「その手は桑名の焼き蛤」が「その手は食わない」の代用とされるのも同じ現象である. もっとも日本語の場合は脚韻を踏めないで, 「くわない」と語頭で韻を踏む, すなわち頭韻 (alliteration) の形をとる.

押韻俗語はコックニーのスラングとして有名であるが, オーストラリア英語にもあるよう

で、オージー・イングリッシュとしてよく例にだされるのは次のようなものである。

Captain Cook=look
 dead horse=sauce
 frog and toad=road
 Noah's Ark=shark
 trouble and strife=wife

例えば You start off with a Captain Cook at the Coathanger behind the Opera House. (オペラハウスの後ろにあるハーバーブリッジをまず見てみることだな) のように用いられる。こういった俗語がどの程度広く使用されるあるいは理解されているか興味があったので、ハイスクールの生徒51人へのアンケートの項目にキャプテン・クックの例をあげてこのスラングについての説明を加えて、こういったものを知っているか、知っていれば例をあげて下さいと尋ねてみた。

聖アイダンス女子学校の女性教師はすぐに trouble and strife を思い出したが、その他の例は思いつかなかった。この種の俗語はいわゆるノン・プロフェッショナルな職業階級の使うもので、ましてやハイスクールの生徒は聞いたこともないだろうというのが彼女の意見だった。押韻俗語は消えつつあるのかと思いながら、とりあえず尋ねてみたところ、51名中、2人の女子生徒が知っていると答えた。8年生の子は Joe Blake を例にあげていた。後日調べたところ cake, や snake, あるいは steak の意味で用いられるとあり、オーストラリアでは steak の意味としてあった。12年生の生徒は fire truck をその例としてあげていた。これについては、残念ながらまだその意味が判明していない。何かタブー語であるような気もする。(女子生徒たちの間では、これも押韻俗語であるがタブー語を韻を踏む語で言い換えるのが流行っている。ただしこれは彼女たちだけに通じるもので一般性はない。この秘密性が俗語の本来の目的であるのだ)。

Trouble and strife (悩みと喧嘩の種) =wife はオーストラリア英語特有のものではなく、コックニーで用いられていたものがオーストラリアに移されたものである。Joe Blake も同様で、英国のものがその用法をオーストラリアで拡大していったものである。Captain Cook は間違いなくオージー・イングリッシュであろう。こういった俗語は皮肉とユーモアに富み、ことば遊び的な要素が強いから、次からつぎに、時代や風土にあったものが新たに作り出され、あるものは消え、一部は時代を越えて残っていくのであろう。

直喩形式をとる表現

英語の表現方法に直喩という技法がある。「とても忙しい」と言うのを、蜂にたとえて as busy as a bee とか creep like a snail (かたつむりのようにのろのろと) のように as~as や

like を用いた表現がそれで、一種の強調用法である。何にたとえるかは文化、地域、時代によりそれぞれ差がみられる。As phony as a three-dollar bill (インチキな) は、アメリカには3ドル紙幣がないことを知っていることが前提となっている。オーストラリア英語にはオーストラリアの社会、歴史、自然について言及した直喩表現がある。

Awkward like a koala up a gum tree (ユーカリの木に登ったコアラのようにぎこちない) は、コアラのそのそした動きからきた表現であろう。これに対し、同じ有袋類のポッサムにたとえて like a possum up a gum tree となると moving fast (動きが速い) という意味になる。like a rat up a drainpipe (下水管を上っていくネズミのように) はポッサムよりさらに速くという意味になる。同じく動物を使った比喩表現としては flat out like a lizard drinking は「うつ伏せになって横たわっている」あるいは「忙しくしている」の意味である。

固有名詞を用いたものには as game as Ned Kelly (ネッド・ケリーのように勇敢でガッツがある) が有名である。ネッド・ケリーは19世紀の後半の有名な bushranger (奥地に住んだ盗賊) である。Shot through like a Bondi tram は moved very rapidly (迅速に動いた) の意味である。シドニー・ボンダイ間をつなぐ電車のこと。市の中心部、タウンホール (市庁舎) からだと、キングスクロスを通して四つ目の駅がボンダイ・ジャンクション、距離にして10 km ほどである。

-o で終わる俗語

オーストラリア英語の俗語には smoko=stoppage of work for rest and smoke (仕事の合間の休憩、一服の時間) のように語尾が -o の形のものが多い。この語尾はある語を口語的あるいは俗語的な形にするのに用いられるもので、例えば beanfeast は英国では「祝い、お祭り」のことであるが、これのくだけた形は beano となる。「インクのしみ、汚点」という意味の blot にこの接尾辞 -o をつけて blotto となると「ぐでんぐでんに酔っぱらった」という形容詞になる。この造語法はオーストラリア英語だけでなく、イギリス英語にも、アメリカ英語にもみられるのであるが、オーストラリア人は特にこれが好きようで John や David という固有名詞まで Johnno, Davo に変えてしまう。次の例はその一部である。

arvo=afternoon (<af のあとに -o がついて f が有声化した) ; this arvo

dingo=a treacherous, cowardly person;裏切り者の臆病者;野生の犬のこと

drongo=a stupid person;馬鹿者; He is the biggest drongo.

lingo=language;言語; Aussie lingo=Australian English

milko=a milkman;牛乳屋さん

speedo=a speedometer;車のスピードメーター

yobbo=a stupid or uncultivated person;チンピラ; boy を逆にしてそれに -o をつけたもの

俗語そのものがそもそも流行り廃りのある短命なものであり、時代にあわぬものは消滅していくように、この -o を用いたオージー・イングリッシュの俗語の中にも *refugee from Europe* (ヨーロッパからの難民, 亡命者) のように消滅しつつあるものもみられる。P. O. D はこれを *obsolescent* (すたれつつある) と注をつけている。社会主義者をあらわす *pinko* などそのうちに消えていくのかも知れない。

-ie で終わるもの

Aussie (オーストラリア人) にみられるような指小辞の -ie を用いたものが多い。職業名でこの形をとるものが割合に多い。*Chippie* は板を削る (*chip*) からきたのであろう、大工さんのこと。(これは英国でも使われているが、オージー・イングリッシュだという人もいる。) *Brickie* は煉瓦つみ職人のこと。*Schoolie* は学校の先生で、これは辞書でもオーストラリア俗語としてある。*Postie* は当然郵便局員ということになる。*Truckie* もオーストラリア俗語でトラックの運転手であるが、「トラック野郎」という感じか。

職業名以外では *bickies* が有名である。これは *biscuits* (ビスケット) のことで、*big bickies* は大金の意味。*Hospital* や *holidays* も *hossie*, *hollies* になるといわれるが辞書には登録されていない。

省略形

ケアンズの空港でぶらぶらあたりを見回しててまず気づいたのはホテルや観光地の案内板のところで、電話番号を *Tel.* と略してある広告が多いこと。アメリカ人などでも名詞の電話番号を *Tel.* としている人も何人かは知っているが、普通は *Phone* が多いように思えたが、オーストラリアでは *Tel* が目についた。時には *Ph* というのも見受けられた。

会社名の後に *Pty* という略号がよくみられたがこれは *proprietary company* の略で *private company* (株を一般公開していない企業) のことをさすオーストラリア英語で小企業に多い。

話ことばにおける省略あるいは短縮にもオーストラリア英語の特徴があるようで、大学は普通 *univ* となるがこちらでは *uni* が普通。*Cafeteria* (軽食堂) は *caff* が多いが、オーストラリアでは *caf* も用いられる。*Jap* は *Japanese* で、*P. O. D.* は *freq. derog.* (軽蔑的な意味で用いられることが多い) としているが、ハイスクールの生徒達は「日本人」ではなく「日本語」という意味で用いている。これには蔑称的な意味は含まれていない。生徒は教科名を略すことが多いが、経済学は *econ* ではなく *eco* と略す場合が多いようである。数学は米国では *math* であるがオーストラリアでは英国式の *maths* が多いようで、ある生徒は科目名の省略形を尋ねたアンケートの答に *maths* と下線を施していた。

その他の俗語

(1) fair dinkum

オージー・イングリッシュとして有名なものに fair dinkum がある。Dinkum は (share) of (hard) work (つらい仕事, その分担) という意味から派生して honest, genuine, real など「本当の, 真正正銘の」という意味で fair dinkum という成句をなす。Fair dinkum? は「本当に?」という意味で, 間投詞として用いられると「本当ですよ」という意味になる。

オーストラリア人は fair という語が好きなようで, “Fair go, mate.” “Give him a fair go.” の fair go は「公平な扱い」「機会」などの意味である。

True blue という語もよく使われているようで fair dinkum と同じく「真正正銘の」「忠実な, 正直な」の意味である。true と blue が韻を踏んでいて響きのよい語である。

(2) G'day mate!

オーストラリアという国, あるいはオーストラリア人気質をもっともよく表す語は何かとオーストラリア人に尋ねると必ず「グッダイ・マイト!」があげられる。初対面の人であれ, 行きずりの人であれ, 顔を合わせると気さくにこう呼びかける。この人懐っこさがオーストラリア人の自他ともに認めるオージー・スピリットである。

オーストラリア人の友人が *The Australian Magazine* という雑誌の切り抜きをくれた。マイトが, 最近では「平等と友好を示す呼びかけ語」から「ニュートラル (中立的) なあるいは敵対的な呼びかけ語」としての用法が増加してきたのではないかという興味深いエッセイが載っていた。フランク・ディバイン氏の意見を要約すると, オーストラリア建国当時の英国ではマイトは労働者階級の間でのみ使われていたもので, 雇い主が使用人をマイトと呼ぶことは, 命令的な口調を避ける平等主義を示すクッションとしての役割を持っていたが, 労働者階級がボスをマイトとよぶことは便利な嘲笑の道具でもあった。仲間とは認めていないものを仲間とよぶことによって相手を嘲笑し, 自分たちの仲間意識を強めるという皮肉な一面がこのマイトには存在する。第二次世界大戦後, 多くの移民が到来したときに, オーストラリア人は移民たちを嘲ってマイトと呼び, 同時に新しい侵入者たちに対して自分たちの仲間の結束を強めるために, 再び自分たち同士をもマイトと呼び始めたのである。この語はつねにこのような相反する意味を持つ, いわば諸刃の剣ということなのであろう。

(3) No worries

オーストラリア人の好きな言葉として No worries をあげておくべきであろう。陽気でこせこせしないオーストラリア人はこの No worries (心配しないで) という言葉がたいそうお気に入りのようで, 質問用紙の最後に「ご協力ありがとうございます」と印刷していたら, その下に No worries, sweetheart! と書いていたグリフィス大学の女子学生, 民宿先とはまったく別の方向にきてしまった筆者に「ノー・ウォリーズ」といってガレージからわざわざ車を出して送ってくれたお父さん, 電話が通じずに困っていると言えば「ノー・ウォリーズ」といって代わりに電話をしてくれたホテルの受付嬢, 困っているときに聞くこの言葉ほど暖かいも

のはなかった。

単なる「どういたしまして」ではなく、この言葉には、アメリカ人の愛用語である *Take it easy!* と同様、くよくよ考えずに、あかるくものごとに積極的に取り組んでいこうとする陽気なオージー・スピリットが感じられるのである。「ノー・ウォリーズ」にはいつも笑顔がついているように思われる。

オーストラリア英語といってもイギリス英語やアメリカ英語とは何もかもが違うわけではない。語彙に関してもほとんどはこれら3つの英語に共通のもので、特にフォーマルなレベルでは英・米・豪の人たちがコミュニケーションに不便を感じることはない。しかしながらインフォーマルなレベルにおいては必ずしもそうではなく、その社会、その時代特有の言い回しや、語句があって、それがその社会の構成員の仲間意識を言語的な立場から高めている。そういう点においてオーストラリア俗語はオーストラリア社会、オーストラリア人の横顔をもっとも鮮やかに描写しているといえる。

参考文献

1. D. Martin. *Australians Say G'Day*. Ozmarket (Australia). 1987.
2. M. Nicholson. *The Little Aussie Fact Book*. Penguin (Australia). 1993.
3. J. O'Grady. *Aussie English*. Lansdowne Press (Sydney). 1981.
4. G. W. Turner. *The Australian Pocket Oxford Dictionary*. OUP. 1989.
5. 樋口 靖「オーストラリアーくらしとことば―」追手門学院大学オーストラリア研究所紀要第12号. 1985.